

思
い
出
す
人
々

西山 厚 全24回

第9回 【金子みずぶ】

金子みずぶさんが残した512篇の詩のなかで、私が一番衝撃を受けたのは「積つた雪」だった。

上の雪／さむかるな。／つめたい月がさしてゐて。
下の雪／重かるな。／何百人ものせてゐて。

中の雪／さみしかるな。／空も地面ちべたもみえないで。雪の気持ちを想像する人はいないと思うが、まったくいないこともないかもしれない。しかし、「中の雪」のさみしさにまで思いをはせる人は、絶対にいない。私も感受性が強く、子どもの頃から、ほかの人が感じないことをいつも感じていた。しかし、「中の雪」のさみしさにまでは、さすがに思いは至らない。

みずぶさんの胸のなかには、さみしさの塊がある。そして26歳で、ひとりさみしくみずから命を絶つた。大津高等女学校を卒業した時、奈良女子高等師範へ行つて教師にならないかと勧められたが、断つた。

もしもそのとき奈良へ行つていたら、まったく違う人生になつただろう。そしてそのまま奈良に住んでいたら、私が奈良国立博物館に入った時には79歳の元氣なおばあちゃん！ きっと仲良くなつたと思う。